

発行日 \*\*\*2008年2月20日 e-mail:akutagawa\_dayori@yahoo.co.jp

芥川だよりの定期購読をご希望の方にはお送りします。お気軽にお申し付けください

編集発行人 下村嘉明

発行所

着物から服を仕立てます



☆着物から服へ・リフォームオーダー☆

☆ポイントカードを初めて作りました☆

高槻市芥川町2-14-3

TEL 072-681-8870



芥川の写真屋さん

## 囲炉裏〜いろり〜



小学生のころ、村の家はどこも茅葺き屋根だった。こんもりと茅でおおわれた家は保温効果にすぐれ、夏はすずしく冬はあたたかい。土間から上がった座敷の中央に囲炉裏がしつらえてある。茅葺きの家には欠かせない装置だ。◆寒い季節、母は朝起きると、まず囲炉裏の火をおこす。長い歳月をかけて蓄積された灰の中には、昨夜のおき火がまだ赤々と熱を放っている。それを種火として焚き木に火をつけ、五徳の上に鍋をかける。鍋は茶釜だったり煮物の鍋であったりする。◆囲炉裏の火は家全体をゆっくりあたためる。冬は薪を囲炉裏端に積み、火を絶やさない。木をくべると、煙がもくもくと湧いてくる。その煙が鼻の奥をつんと刺激し、目に浸みて、鼻水がこぼれ、涙があふれ出る。中でも松ノ木の煙は樹脂を多く含み、けむたいことこのうえない。幼いころ「どうして、こんなにけむたいのか？ 煙なんか出なければいいのに」と思った。◆煙は、たいへん重要な役割を果たしている。天井を這い、柱を登って、屋根を支える竹組の棟から茅の中に入りこんでいく。家のすみずみに煙がしみわたり、家を燻蒸する。煙は家を蝕む害虫を寄せつけないだけでなく、腐食も防ぐ。黒光りした柱や梁はどんなに鋭い鋸も刃がたたない。煙によって家は強固になって、二百年、三百年ではびくともしないのだ。◆囲炉裏をはさんで祖父と向かい合ってすわっているとき、ゆらめく炎に照らされた祖父の顔のしわが、赤く光る隈取りのように見え、煙越しの祖父は仁王様だった。

## 芥川商店街歳時記

今月の予定

2月25日 天神祭り・餅つき大会 お手伝い参加者募集！

午後1時～芥川商店街にて 甘酒・綿菓子・ポン菓子なども並びます

3月20日～23日 アーケード・リニューアル・記念セール

おい、カラスよ \*\*\*リレーエッセイ\*\*\* 「おい、カラスよ」で始まるエッセイを募集します

灰色の空、めずらしく早朝からぼた雪が降った。

仕事に向かう途中、橋の上から川面をのぞくとカラスがいた。

遠目でもその濡れ羽の黒は見事で、表情は見える訳でもないのに、じっとしている風情はしたたかそうに見える。

その内心、何を考えているのだろうか。

白サギの餌を横取りするチャンスを狙っているのだろうか。

何をして今から遊ぼうかと思案しているのだろうか。

今日は土曜日。ゴミの収集車が通るのを計画どおり待っているのだろうか。

寒さの中、このぼた雪の空模様を心配しているのだったら、意外で面白いのに・・・。

その風貌で勝手にイメージされているのは、私と一緒に・・・。

今年はず支はじめの子歳です。おだやかな年と言われますが、さてどうなることやら。良い年にしたいものです。人間の目というものは、前に二つついていません。後ろを振り向かず、「常に前を見て進めて」ということなのでしよう。

新年の集まりで、まだ七十歳位かなあと思う人が、お膳をながめて、やわらかいお豆腐ばかりつついて一向に箸が進まないのを見て、「どうしたの?」「入れ歯の調子が悪くてね。情けない。ブツブツ」。集まっているのは年輩同志。お互いに年はとりたくないものと、言う話から、だんだん愚痴ばかり。こころへんで話が明るい話題をと思っていたら……。

「でもね、私はそうは思わないのよ。入れ歯する時、自分も年をとったなあ、とつても淋しかったわ。けれど入れ歯することも出来ずに、入れ歯の味も知らずに死んだ人も知っている。生き長らえて入れ歯をする年まで生き、入れ歯であろうと目が悪くても、生きてさえいたら、よいことも悪いことも味わえるようになったと思つたら有難い感謝する気持ちで生きられるようになった」と話されたので。みんなも成程そうだったなあ「気の持ち方よ。年をとれば、眼も歯も悪くなるわ。少々悪くたって、床に寝たきりの病人

じやなし此の場所へ来られただけでも幸福よ。パチが当たるよ」。この一声で一座のジメジメした空気も吹き飛ばされ、パツと明るい雰囲気があったよ。つてきた。

自分も「生きるということ」と突然たずねられても答えが見つからないのです。



きものへの挽歌

モンペと下駄で迎えた六十年前、現在の女性のなんと美しく若々しくなつたことか。

消えたモスリンやネルの着物。ある家庭を訪問し、タンスの整理を依頼された時、中を見て驚くばかり。英ネルの夫婦のネマキがちゃんと底に美しく並べてあったのを見てズキンと胸にこたえた。

この時代は、みんな夫婦のネルのネマキを揃えて嫁入り荷物の一品として当然だったのだが。「死んだら桶の中へお父さんと一緒にに入れてもらうのや、このネルを着てな」という。この顔の美しく輝いていたこと。今頃は何を考えて生きて居られるやら、出会うことさえままにならない。

六十年たった現在、何もかも変化し、高度成長に支えられて、私達は着物レパトリーから一番安いものに切り替わってしまった。

確かに、街で見る限り、和服は減っている。浴衣一日で一枚。振袖、訪問着で一週間。間に一枚しか縫えない。縫う人も少ない。仕立賃もお手上げの状態。だから、どうかは別として、しかも女性、母親がドライになると、着物の衰退もやむをえない。

その前兆としてブラック・フォーマルと呼ばれドレスが、和服の喪服を食っているのが真実。勿論葬式と結婚式では、同じセレモニーでも楽しさ、晴がましさが違うから、そう簡単に着物は無くならないだろう。

こわいのは、最近の親心である。結婚して出て行く娘のために、何十万もかけて一揃い買ってやって、おまけに娘が着る度に、わざわざ、新婚家庭まで訪れて着物をたたんでやるなんてゴメンだね、という母親が増えた時。

さて、着物市場はどうなるのだらう。



映画「母べえ」を観て

泣けて、泣けてというのが真実、自然に涙がにじんでゆく。隣の座席に男性が観て居られ、同じく涙、涙の顔を見る。何かを思い出して、あふれる涙を押さえて居られるみたい。感激。「出征軍人の家」。我が子を、夫を、兄を戦地に送り、銃後を守る私達に何が出来たのか。吉永小百合さん扮する母べえ、強い言葉、愚痴ではない叫び。二人の子供達の素直に育つてゆく姿。一瞬淋しく映り、楽しげな笑顔の向こうに見える遠い時代が、はつきり浮かび上がってくる。浅野さん扮する山崎さんの純粋さ、心に通じる暖かいもの。母べえのやさしさ、この映画で見事に画かれていた。山田洋次監督の見事さ、大画面で観ていて、何をかいわんや。よき映画と。豊かな経験を体で感ずることが出来た。

明神岳は、徳高の神のご神体として崇（あが）められ、昔は徳高岳と呼ばれていたという。明神岳主峰は、最南峰より三番目のピラミッド型の山で、標高は二九三一mである。

よっちゃんは、大学二年になったが、学校は大学紛争で封鎖されていて実感はまるつきり無く、本来の勉学は横に置いて山岳部という勉学のみだった。まだ山には雪の残る五月、よっちゃんは明神岳主稜を登ることになった。

学生は、よっちゃん、S太、M蔵の三人であるが、OBが三人加わったので六人のメンバーである。河童橋で待ち合わせして、はじめてOBの顔を見た。ひとりには東京から、ひとりには横浜から、そして最後のOBは川崎から来た。連休を利用するので我々が、OBの日程に合わせてかたちになった。OBは、もちろん個人装備しか担がないから、よっちゃんは彼らの食料からテントなどの共同装備を担ぐから当然重くなる。

リーダーのS太が話してくれた情報によると、参加するOBはヒマラヤ帰りの、えらい強くて、オッカナイOBであるということだった。

そんな事よりよっちゃんは、四月になり新入生が新入部員として入ってくるか

ら、二年になった。二年はトップを歩く。状況判断して、読図して歩く。二年はもう新人ではないから、上級生もとやかく言わない。怒られることも少ない。そのかわり失敗しても自分の責任である。このこちよいい気分をよっちゃんは初めて味わった。

たとえバテテも一年ほど叱られることはない。一年と二年では全く違う立場になる。まあ会社でいえば、いつきに平社員から係長になったようなものである。係長の経験が無いからわからないが、責任は係長より重いかも。山行きの計画の作成から実施する権限の一部が与えられる。当然、OBなどの接し方も違ってくる。名前も覚えてくれ、機会があれば飯

をおごってくれる。これが四年になれば、もう凄い待遇になるのだが、新人のほとんどは一年以内で辞める。つらさに一年もたないわけだ。がむしやらにきて無事二年になったよっちゃんは、この五月山行で一年と二年の全然違う待遇がとにかく嬉しかった。

OBとよっちゃん達は待ち合わせして「おう元氣か」と言った簡単な挨拶をしてすぐに歩きはじめた。よっちゃんは初めてトップを歩く、後ろにはM蔵、S太、そしてOBがつづく。一番の下級生はやはりよっちゃんであったが、一年生とはちがう。知らない山ではあるが、何かしら余裕があるのである。

重いザックを担いでいるが雪は無いし、ラッセルしながら歩くことを思えば楽勝だと思った。なにしろ、気持ちがある。

岳沢への登りを少し歩き「この辺やろ」というリーダーの声で、道を外れる。針葉樹林帯の木々の間をぬけ明神岳五峰の南西尾根に取り付く。この辺りは自殺の名所であると後で知ることになる。この尾根は非常に急で、重く大きいザックを担いでは登りにくい。それでも木々の枝などをつかみながら、なんとか樹林帯をぬけた。すると残雪がべたべたと付いた雪壁が上まで続いているルンゼの下にたどり着いた。

「えらい、こっちゃん」よっちゃんは、こんな急な雪の付いたところを登ったことが無い。ザイルを出すかと思っただが、OBのひとりがザイルなしで登り始めたので、よっちゃんはあとを追うように登ると、そのOBは少し登ったところで待っていた。よっちゃんが追いつくと先に行けと言う。踏み跡が無い雪の急斜面をつま先で蹴りこんで登る。キックステ

ップというこの登り方は、ピッケルを差込みバランスを上手く取り、一気に登らないといけない。バランスを崩せば滑って落ちる、落ちれば死ぬかもしれない。こんな登りが一時間以上つづいた。最後はへばりつく感じで稜線に着いた。五峰の頂は狭いが眼下に上高地が見えた。

上高地の河童橋から徳高連峰をみて、右手の一番手前の岩山が明神岳五峰である。

ヒマラヤの山登りの経験があるOB達は、さすがに強くて登る技術が上手い。早く登って待っている。ひとりのOBは、もしよっちゃんが滑り落ちた場合に備えて最後尾から登ってくる。よっちゃんも「しかし、山岳部とは、えらいもんだなあ」と感心した。あんな急な雪の壁をザイルなしで登るんだから。稜線は狭い岩棚がつづくがヒマラヤ経験のOBは早く歩く、とにかく早く歩く。ぐずぐずしていると、冷やかされる。さすがに二年になると怒られることは

なくなるが、皮肉られる。それで負けん気の強いよっちゃんは、ザイルは二峰の下りで形ばかり使っただけであった。思えば、よっちゃんは上高地は初めてで、その景色は箱庭を覗いたように梓川が険しい山の谷間を流れ大正池が小さく焼岳の白煙ともに見え、そのさまはそれは綺麗だったろうに、そんな余裕も無くOBについていく事に懸命だった。

二峰を下ったところでテントを張った。少し早かったが雪の雪面を削りテントを建てた。その日は、OBの持参した酒とつまみで宴会をした。この時に会ったOBが、その後のよっちゃんの人生に、かくも大きな影響を与えたとはい、そのときには考えもしなかった。

思い出を語るにはまだ少し早いようにも感じながらも、一息入れますか！

埃も垢もいっぱい身につけて此処まで来たのかな。手繰り寄せればそこへと飛んでしまう幼き頃、それは私だけであろうか、それとも人等しくそうなのだろうか。

雨の日は、母の着物を思い出す。山里の雨は冷たい、早く温もりたいたいので坂道を上る。小学生も低学年、徒歩が一番の交通手段、大人も子供も歩くことが生活することだったような時代と思う。

私が生まれ育ったのは国鉄山陰線沿いの山村、その集落の端、二百メートル程の坂を上りきった終わりに、ぼつんと建つ萱葺きの家だった。周りは小さな田圃と山、隣の家まで百メートルは離れている。リヤカーが通れる程度の道幅、小石がころがり雑草が活きよいく生えている。大雨が降ると、人の道なのか水の道なのか判別できない。

登りきると幾分平らな土地になり、隣家と二戸だけが建つどこか隔離されたような場所である。隣家はその昔我家より分家したとか。少ない土地を二つに分け、痩せた土をそれぞれ代々耕

作して命を繋いで来た。墓石には初代の没した年号が享保〇年とある。「暴れん坊將軍」(吉宗)の時代からここに居を構えていたことになる。

まだ昭和三十年代の初め、今思えば十数年まで戦争の当事国、そうしたものは何も感じはしなかった、いや何も分からなかったが、きつと生活そのものはその影響を免れてはいなかったのであらうし、大方の家が貧しくて当り前、それが普通だった時代のはず。

息せき切って家に着くと、母が居る。しかも着物を着ている。何かあるのかと思うが、変わったことはない。いつも一日中農作業に従事、夕飯の支度時まで外で働く。季節によっては雨だからといって家に居られはしない。ちょうど農閑期だったのであろう。

家の中に居ることが珍しいのに、着物姿の母を見た時の私の思いは、如何様な文字にすれば表わせるのか、安堵安心、和み、安らぎ、温もり、あーそのどれでもない。そう自分の頬がなぜか和らいで行く、笑いにも似た感情が勝手に湧き起こるとも言えはいいのであろうか。

普段の手拭いを被るモンペ姿ではなく、安物なのだろうが着物を着ている母の姿は、もうそれだけで私を十二分に包み込んでくれた。話しかけたくなるような、わくわくするような、それ

でいて平穏な気分なのである。あの空気が忘れられない。

意図したものでなく、きつとまともに身につけられるものは当時それしか無かったのであるが、今もって記憶の奥底に残るのは、着物姿の女性にはそこに醸し出す何か特別のものがあるのではと考えてしまう。

あの頃参観日の母親たちは、皆着物ではなかったらうか。時を越え日本人の遺伝子に組み込まれて来た(と思われる)着物が、いつの間にか日常生活から遠ざかってしまった。それにより得たもの、失ったもの、良かったこと、悪かったこと、その答えを持合せてはいないが、何か大切なものを忘れてしまつことは確かと思う。

世のお母さん方がたまに着物姿で子供やご亭主を迎えれば、世相(人)に棲みついた良からぬ現象も少しは予防出来るのではないだろうか。飛躍しているでしよか、短絡的な郷愁だろうか。夜の

ママさんたちの高価な着物姿からは、当時の感情は沸き湧き起らない。高価でないほうがいい、エプロン

掛けが似合うような普段着の着物がいい。

男は何時までも子供、男も子供も女性の生み出す空気で心を育て生きている。

その母も脑梗塞から認知症、病院のお世話になって命を保っていてくれる。週に一度は訪ね、骨に皮だけが付いている手を握る。「理やで、分かるかあー」。



## 新たな生活(その二)

大阪で始まった新たな生活は戸惑いの連続です。慣習やしきたりは東京とまったく異なっていますし、言葉もちがいますから、異郷にいるという感が深く、はじめて経験することばかりでした。わからないことだらけですから、何ごとにも一生懸命です。「ご飯の炊き方やお湯の沸かし方、水の汲み方……など、はじめは上手くできないけれど、慣れるように心がけました。

「カンテキで枝木を燃やして、そこへ炭をのせて、お湯を沸かしなさい」と姑にいわれて、「カンテキ……、カンテキ、カンテキ？」と三度言葉を繰り返して呆然としていると、「そこにあるでしょ、目の前に」とおっしゃる。「あつ、コンロ(七輪)ですか」とやつとわかった次第。マッチをすり、新聞紙に火をつけて小枝を小さく切って燃やし、そこにカラケシの炭をのせます。しばらくすると炭が赤々と燃えはじめました。

こちらのおばちゃんに教えてもらってください」と紹介してくださいました。お手伝いさんは「仲さんが出征してしまわれたので、サツパリですなあ」と慰めとも諦めともつかないような挨拶をされました。私は若かったせいから、「今日日本はたいへんな時ですから、個人の自由なんていつている場合ではありませんね。みんなして頑張らなければなりませんから、個人の勝手などいってはいけませんよね」などと生意気なことをいった覚えがあります。

おばさんは、寺に来てからちつともじつとしていません。よく働くことに感心しました。藁を少し束から引つ張り出して輪にして、かまどにくべると一瞬にして藁に火が移って燃え上がります。一升釜を加熱する火の勢が増してきたとき「はじめチョロチョロ、中パツパと炊くのですよ」と教えてくれました。

私はご飯を炊いたことがなかったのです。実家では女中さんが何もかもしてくれていました。よくもまあ、何も知らないで、女学校の家政科を卒業しただけで、何とかなると澄まして嫁入りしたものです。我がことながら可笑しかったです。「さあ、これから一から勉強しますので、いろいろ教えてください」とお手伝いのおばさんをお願いしました。

藁の輪結びは何べんやってもうまくできないので、情けなくなりました。誰でも簡単にしている事なのに、こんな簡単なことすらできないなんて、私は使えないものにならないんじゃないかしら、と思つたものです。それも何度も稽古をしているうちに、一番簡単な藁結びはできるようになりました。

そうこうするうちに「ご飯が噴いてきました。そのとき姑がやってきて「全体から湯気が上らないと、おいしいご飯になりませんよ」と注意します。私はいっぺんに緊張して「はい」と返事をし、藁を燃やしました。「あら、そこそこ上手じゃないの」とほめられて少しうれしかった。「少し蒸らしたら朝ご飯にしましょう」と姑。

姑は味噌汁をつくります。お鍋に湯を注ぎ、大根の千切りを入れ、鰹のだしを入れる。お味噌を瓶から搾り鉢へ少し入れ、「レンジを取って下さい」といわれる。私はレンジが何だかわからない。「レンジ、レンジ」と台所の真ん中でクルクルまわっていたことを憶えています。「そこにあるじゃないの」と姑はいいながら、スリコギを手に取りました。「なあんだ。スリコギじゃないですか」と私は笑ってしまつた。三人で大阪弁と東京弁との違いで大笑いしました。

言葉では随分苦労しました。東京言

葉は標準語といつても、全国で流通しているわけではなく、標準語はどういう言葉なのかということは知られていませんでした。大阪の人は当然大阪弁で話をします。舅も姑も教育者で、標準語がどういふものかを知るためにも、家の中では東京弁で話をしてくれるほうがいいとおっしゃいました。「あなたはこちらの方言を真似しないでね」と姑からいわれた。私が「そやからな」なんておかしな言い回しをする、かえつておかしいと笑われて、「やめときなはれ」と注意されました。

日がたつにつれ、つるべを使った井戸の水汲みも、お湯を沸かすのも、カンテキでの煮炊きも、自然にできるようになりました。

年の暮れにお餅つきをしました。近所の井戸のある家に行つて、洗米させてもらい、こし水で餅米を炊きます。本堂に供える三重や二重の餅をつくるのです。学校から帰つた四男の弟が杵でつき、姑が臼取りをします。お手伝い



「役所仕事」

くいのおばさんは火のかかり、私はお餅を取り上げるのし板に米の粉を広げたりしました。東京では、にぎやかに母の実家で多くの男衆が交代でつき、女の人たちは手水をしながら白取りをしたものでした。

寺の入り口の正面に屏風を立て掛け、三方に半紙を載せて裏白をしく。その上に大きな二升の餅を置き、さらに一升五合、一升と三重ね餅をつくる。昆布の上に干し柿や橙を飾り、大きな鏡餅をつくりました。次に小さな餅を幾つかついて、餅つきは終わりです。

「やれやれ」くたびれたけど、弱音はいえませんが。後片付けがなかなか大変なのです。せいろ、杵、臼、のし板などを洗い、片づけてようやく終わりました。

「今夜は、お風呂をたきましよう」といわれるので、私は井戸から水を汲みました。はじめはうまくいかず、バケツに縄をつけて引き上げるのにどうしても時間がかかってしまうのです。風呂の焚き木は、川で拾ってきて干しておいた流木です。それが焚き付け口の近くに積んであります。経済的な生活だなあと感心しました。

正月を迎える準備も知らない事ばかり。一月三日は私の誕生日です。正月を迎えたら、一度東京へ帰らせてほしいとお願いしました。

母が死んだ。医師から貰った死亡証明書を葬儀屋経由で役所に提出した。それで全て片が付いた、と思っていた。

ところが、死後も国民年金が送られて来る。放つて置こうかと思つたが、面倒な事になつても困るな、と思い、社保庁に母の死亡を連絡した。それで全て片が付く、と思つた。

ところが、払い過ぎた年金の返却手続きが必要だ、また、弔慰金を支払う、そのために色々な書類が必要だ、という。

①死亡診断書②住民除票③戸籍抄本④母が生きていたことの第三者の証明書、など。

勤めがあるので、妻に書類を揃えて貰うことにした。妻もパートの合間を縫つてのことなので、暇が掛かる。

母が死んで四か月。ようやく、手続きが完了した。

役所とは、人の死に際しても手間掛かることを強いて来るものだ。(龍)

貴方の思いをお寄せください。

一八〇～二五〇文字位で

貴方の心のつばやきをお送り下さい

アレルギーの脅威 (1)

山彦海彦

いやはや、思いがけず世は中国の有機リン毒入り餃子で大騒ぎになっていきます。今騒がれているのは急性中毒です。もっと怖いのは、隠れて表面化しにくい慢性中毒です。その深刻な実態をくわしく知りたい方は、有吉佐和子さんの『複合汚染』(新潮文庫)や、前号で紹介した石川哲さんの共著『化学物質過敏症』(文春新書)をお勧めします。

ちょうどこの拙稿を皆様読んでおられる頃は、杉花粉症の真つ最中でしょう。

花粉症が欧米で「枯草熱」として人体に初めてあらわれたのは、産業革命がはじまった二百年あまり前のイギリスでした。それ以後、杉以外にアレルギー反応を起こす草木の種類は増えていきます。花粉症はヨーロッパから北米へと広がり、日本ではじめて確認されるのは一九七〇年頃の栃木県です。栃木県は産地帯ではありませんが、花粉症はまるで産業文明の発展を追いかけるように広がっていくのです。この謎を解くためにはアレルギーの歴史を語らねばなりません。

食物アレルギーをあらわす古代の言葉があります。

「チーズで具合が悪くなる人がいる」

(ギリシャ時代の医学者ヒポクラテス)

「食物は人によつては毒になる」(ローマ時代の哲学者ルクレチウス)

食物によつて病気になることは、長い人類の歴史の中で少なからず断片的に哲人による指摘がありました。その解明の端緒を開いたのは、一九二〇年代のアメリカの医師アルバート・ロウです。彼はアレルギーになりやすい食物を食事から除去することによってアレルギー症状が消失することを発見し、いわゆる「除去食」を考案しました。その過程で、抗原となつている食物を除去すると、身体症状だけでなく精神症状などの様々な症状が消え、食べさせると症状があらわれることに気付いたのです。

アメリカのアレルギー学会議長も歴任したロウは「アレルギー性毒血症と疲労」という論文を発表しました。しかし、当時その考えに賛同を示す医師はごく少数であり、科学的な根拠がないものとして学会から否定されました。アレルギー学は二分され、ロウの一派は異端と決めつけられました。まさに学会が二分される時に議会議室で公聴していたのが、若き日の医師セロ・G・ランドルフでした。

彼はロウの研究を引き継ぎ、合流したハバート・リンケル医師らと共に食物や微や埃などの環境由来の抗原がアレルギー反応として皮膚や呼吸器、消化器官だけでなく、関節（リュウマチ）や脳（精神疾患）など様々な病気を起こしていることを解明したのです。ランドルフの研究はさらに人工の化学物質へと進みました。

彼は当時、重工業化が進んだシカゴに住んでいました。一九四七年、ランドルフのもとにある女性患者が訪れました。医師の妻であり化粧品販売員のノーラ・バーンズさんです。詳しくは故ランドルフ先生の著書が邦訳（『人間エコロジーと環境汚染病』農文協）されていますので、ここでは簡略に述べます。

彼女は頭が重い、立ちくらみがする等の身体症状以外に、いらいらや憂鬱、考えがまとまらない等の精神症状があり、他の医師からは心気症と診断されていました。今風に言えば自律神経失調症でしょう。

しかし、ランドルフは環境中の何かの原因が潜んでいると考えて、彼女の訴えをことごとくカルテにタイプライターで打ち込んだのです。診察する医師の主観が入って誤判断を招かないようにするこの診断方法を、後の人は「ボーカーフェイス診療」と呼びました。

四年後の一九五一年、彼女のカルテが五〇枚を越える頃、終に謎が解明される時が来ます。シカゴに温帯低気圧が襲来しました。診察のために遠方より宿泊していたバーンズさんは予約をキャンセルすることなく、ランドルフの診察室に来院したのです。患者は彼女だけでしたので、ランドルフが彼女とゆつくり話し合いながらふと窓の外を見たときです。まさに寒冷前線の通過で風向きが北に変わり、ミシガン湖畔の工業地帯から汚染された空気が到達しようとしていました。そして突然彼女のいつもの愁訴が始まったのです！彼女は、それまでランドルフらが研究していた自然由来のものではなく、石油とその燃焼物に反応を起こしていたのです。

シカゴに来るハイウェイで工業地帯を通過するとき気分が悪くなること。ある時は渋滞中の車の後列にいただけで気を失って危うく事故になりかけたこと。それらのエピソードは全て石油関連の燃焼物を吸い込んだからでした。またシカゴに宿泊するとき、ホテルの高層階に泊まると、なぜか具合が悪くならなかったのです。それは、排気ガスのスモッグは空気より重いために上層階に汚染がとどかなかったからでした。

ランドルフは、自然由来のものだけ

でなく化学物質すべてを排除した部屋で治療することを考案しました。E C U (Environmental Control Unit)、環境調整室です。一九九九年に北里研究所病院に新設された化学物質過敏症外来に設備されたクリーンルームと同等です。現在シックハウス症候群に取り組む全国六カ所の医療機関に設置されています。

七〇年代、これらのことに興味を抱いたカナダの精神科医エイブラム・ホッフアーの追試では、彼の病棟クリーンルームではありませんが、で汚染されていない飲料水で断食をするだけで四日後に精神疾患の全患者の六〇％が完全な寛解したと驚くべき報告をしています。

また二〇〇三年に東京で開かれた「室内空気質に関する国際会議」では、除去食とクリーンルームを組み合わせた方法で自閉症児の全患者が治癒したことが、カレン・スリマク精神科医から報告されました。これを「脳アレルギー」と呼びます。

にわかには信じがたいと思いますが、ランドルフの研究後、ニューヨーク州立大学小児科助教授のドリス・ラップ医師が二〇年来の診療でつぶさに記録した患者の脳アレルギー反応の映像があります。芥川だよりの編集長へDVDを送りましたので、ご覧になれ

ば、深刻な状況をご理解いただけたと思います。

ラップ医師は、今児童の間で増加しつつあるADHDや学習障害、アスペルガー症候群、自閉症、トゥレット症候群などを脳アレルギーとして診察治療してきた女医です。当然のことながら喘息やアトピーの増加はそれら発達障害の増加と正比例しております。アメリカでは八年間隔で倍増、日本では既に全児童の六・三％に発達障害がみられます。

医学界に認知されないまま、アレルギーは今まさに恐るべき段階へと進みつつあるのです。



養女として③

千寿子十五のとき、浅間温泉で一人の学生と出遭う。彼は東京から大学ホッケー部の合宿で信州にきていた。千

寿子は、恋というはつきりした自覚はなかったが、その学生に好意を抱いていた。彼も千寿子に思いを寄せていたようだ。遭うのは彼が信州にやってくる時だけである。手紙のやりとりは幾度かあり、彼の写真が同封されていることもあった。手紙は残っていないが、写真は二葉残っている。

一枚は、出遭った年の十月に大学のグラウンドで撮った写真である。右手にホッケースティックをもち、杉の木によりかかるスラリとした姿は、若々しい精気があふれている。わずかに笑みをうかべる日焼けした表情はさわやかさだ。達筆のサインが、自分の姿の上を右斜めタスキ状に横切るように書かれてある。

もう一枚は軍服姿の写真である。一点を見つめる眼差しは緊張を帯びている。彼は相模原陸軍通信学校の幹部候補生となっていた。撮影は昭和十九年十月二十日とあるから、戦局は敗色が濃厚になっていった時期である。この写真が送られてきたのは昭和二十年四月であるから、日本は絶望的な抗戦をつ

づけていたところだ。写真の裏に「正八邪ヲ誅ス。断ジテ行ヘバ、鬼神モ之ヲサクノ幸デアレ。千寿子殿」と書かれていた。これが最後の手紙となった。彼も、大陸で戦死した兄と同じ運命をたどったのだろう、と千寿子は思っていた。

それから二十数年後、大学紛争が全国規模で起こった一九六〇年代後半、テレビを見ていたお袋は驚きのあまり、言葉を見失う。東京の某大学で、学費値上げに反対する学生たちによって卒業試験が阻止された。その責任を取って学長が辞任表明する様子がテレビに流れていた。そこに映し出された学長その人が、彼だったのだ。「戦争で死んでいなかったんだ」と安堵するようにつぶやいたお袋にとつて、いまや、テレビに映るその人ははるか遠い存在であり、思い出の中でのみ生きる初恋の人だった。

お袋から少女時代の話をじっくり聞く機会はなかった。ときどき断片的な思い出を語ったのみで、もはや言葉を失ったお袋から聞くことはできない。

いくつかの断想の中で、お袋の胸に印象深く焼きついている思い出がある。それは、おばあちゃんと親にいった舞台公演だ。恋に殉じた女優・松井須磨子の生き様を演目とする舞台であった。須磨子は、烈しく燃えさかる炎のように生き、病死した師であり恋人である島村抱月のあとを追って、自ら三十二年の人生に幕

を下ろした女優だ。

松井須磨子は女優になる前に、一時期須坂に住んでいたことがある。そのときおばあちゃんは須磨子を見かけたことがあったらしい。同世代でもある須磨子の烈しい生き方に、何か惹かれるものがあつたのだろうか。お袋はおばあちゃんから須磨子の話をよく聞かされていた。

須磨子は明治十九年（一八八六）、信州松代に生まれる。本名は小林正子。小林家は真田家に仕えた士族である。正子は九人姉の末子であった。

六歳のとき、叔母が嫁いだ長谷川家の養女となる。子どものころから勝ち気で、小学生のとき、男の子と喧嘩をして鎌で頭を切られたことがあつた。十三のときに養父を亡くし、叔母とともに実家に戻った。翌年には実父の死にあう。

父は亡くなる前に正子を枕元に呼んで、「東京に出ろ」と一言いったという。

十五の春、上京し、麻布板倉にある姉の嫁ぎ先、菓子店の風月堂に身を寄せる。姉夫婦は気の強い正子を、温雅な娘として世間並みに通用させようと裁縫女学校に通わせた。正子は風月堂の看板娘となり、店に正子が座ると菓子がよく売れたという。

縁談の口がいくつもあり、従姉の夫がもってきた話がまとまって正子は結婚することになった。明治三十六年（一九〇三）、十七歳の十一月はじめ、上総の木更津にある割烹旅館に嫁いだ。好きな都会を離れて、馴染みのない異郷での生活に鬱々としていたのであるうか、姑である女将との関係がしっくりとうまくいかなかったのか、若主人の放蕩に悩んでいたのか、正子は健康を害し、痩せ衰えてしまう。それを肺結核と疑われたらしい。不治の病である肺病ならば、その累は一家におよぼすことになる。翌三十七年二月に正子は一方的に離縁された。わずか四カ月ほどで最初の結婚は破局する。

離縁された正子は、ふたたび東京麻布の風月堂に帰った。帰って間もなく神病院に入院するが、悲観的な思いに沈んでいたらしい。食は喉を通らず、心を閉ざしてしまった。

三月に風月堂の土蔵で自殺をはかる。自殺未遂後は風月堂で暮らすことは許されず、小林家と縁の深い町田医



松井須磨子(1886~1919)



院に入院して治療に専念したが、病は癒えなかった。

六月から信州坂城町の大英寺で静養することになり、姉のますに連れられて信州に移った。小林家と町田家から多額の静養費用が大英寺に送られたという。この大英寺で、再婚相手となる前沢誠助と出会うことになる。前沢はこのとき植生小学校の訓導をしていた。

大英寺で、正子の健康は徐々に回復し、心の落ちつきも取りもどした。元氣になった正子は、三十八年に須坂で製糸業を営む叔母の婚家、小田切家にあずけられ、十人足らずの女工とともに働きはじめる。前沢も須坂小学校の訓導に転任していた。彼は小田切家をたびたび訪れ、正子の家庭教師をしていたらしい。

須坂に住んで数カ月、ある朝、正子は突然姿を消す。二十歳のときである。

◇ ◇ ◇

\* 次号から、介護日誌からは大きくそれてしましますが、松井須磨子の短い女優人生について五回ほど連載します。戸板康二の著した評伝『松井須磨子——女優の愛と死』や長谷川時雨のエッセイを導き手として、須磨子という希有な女優の烈しくも哀しい生き様をたどってみようと思えます。

## 人事評価

サラリーマンエッセイ⑤  
明石 幸次郎

サラリーマンにとって自分の仕事ぶりを評価するのは、直属の上司であり、往々にしてこの評価で出世が決まったり、年収までもが左右されたりする。

上場会社の殆どが“成果主義”を人事制度に導入して、仕事の成果により昇進、昇給、ボーナスなどに反映させて社員間格差をつけて、若手社員を管理職に抜擢したり、ぬるま湯に浸かっているようなベテラン社員を飴と鞭で刺激し、組織を活性化して業績向上を図ろうとしています。

私のもといた会社も、トヨタも松下も日立も成果主義を導入して多に成果を生んでますと言う人事コンサルタントの戦略にはまり、高額なコンサル料を払い、成果主義を金科玉条の如く、人事制度の根幹におきました。この成果主義と言う制度は、先ず期初に、チャレンジシートに今期は何にチャレンジして、どういった成果を上げるかを社員が事前に上司に申告し、期末になれば、それを上司が評価し、五段階相対評価で成績を付けていきます。営業であれば売上げ額を幾らにするとか、新市場を開拓して二年後に何億の売上げにするとかの数字を具体的に書けませんが、間接部門はチャレンジしよう

することに對して数値化することはなかなか難しいのが現実です。

問題は、評価される方は、余り出来ないような数字を上げると結局は自分の首を絞めるので確実に達成出来る数字しか上げないことです。また、評価する上司も部下が成果を上げなければ、自分も管理職としての成果を問われるため、達成出来る範囲の内容にしまし、やる気のある部下がチャレンジしようとするのを抑えてしまいがちになります。結果として、会社の狙いとは違う方向に向いてしまし、若手の意欲を上司が保身のために潰してしまし、その結果、部下の評価は客観的

成果主義ではなく、従来と何ら変わらない、評価する人の主観的人事主義で決まってしまう。また、この制度が問題なのは、建前と本音が乖離して、成果主義と言う建前だけが重視され、従来の制度より、上司に大きな権限を与え、その人の考えだけで部下の昇格、年収が大きく左右されるようになったことである。その為、要領の良いサラリーマンは日頃から、自分を評価する上司の方針に絶対服従をしめし、何やかやとゴマをすり、夜のお付き合い、休日のゴルフコンペ等々、あらゆる機会を見つけ、上司に對する自分の心証を良くしようとするようになりまし。

上司も人間ですから、自分に忠実な部下を可愛がり、良く仕事が出来ても忠実でない部下は評価を悪くしがちになります。今や、直属の上司によってサラリーマン人生が大きく影響されてしまうのです。上司に声をかけられると、家族との約束を反故にしても、飲み屋に付き合

い、休日は家族との団欒を犠牲にしても、誘われれば、社内のゴルフコンペに付き合い、上司を初めとした、社内の心証を良くしようとする。多くのサラリーマンは常に同僚、同期との競争にさらされ、自分が会社で何をやりたいのかを考えずに、上司の方針にだけに忠実に従おうとするあまり、自分を常に抑えてしまし、その結果、大きなストレスを溜めこむことになるのです。この制度が導入されてから、確実にサラリーマンの心身症が増加しているのです。それは、殆どは直属上司とのそりが合わないとか、周りに自分を適応させようとするあまりの、過剰順応の人間関係が原因であると思えます。

上司と上手く行かないと、違う部門に転勤するまで救われる道もあるのですが、一度、上司の罰点がつくと、転勤した部署でも大抵は何かの問題を起こした前科の付いた問題社員として見られがちになります。この罰点の中で一番多いのは組織に対する協調性に欠けると言うものです。

立木 理

再び昭和三十年代半ばに戻る。

人様に語るべき事柄ではなからうが、もう五十年も昔のことであり時効でしょう。

年明け早々にお寺さんより手紙が届く。どうせ寄付とかなんとかお金のことだろうと数日そのままにしていた。盆だ

暮れだと近年振込用紙が送付され、ご丁寧に振込人たる私の住所も名前も金額も記入済み、これとお金を持って郵便局へ

早く行きなさいと段取りの良いこと。商売はここまで徹底し、相手さんがしよ

様にあげなければなりませんよと教えて下さる。

開封すると振込用紙は入ってはいなかった。一通の紙面に祖祖母と父親の法事

の年であるとの知らせ。父の十七回忌は覚えていたが、祖祖母については記憶か

ら全く欠落していた。祖祖母が亡くなって五十年の時が流れていたのである。私

が五十代半ばを過ぎていたのだから、勘定すれば合っている。あーそうかと今回

何故二年生と結び付くかと言えば、そ

の日担任の先生に「見たの？」(だったと記憶)と聞かれたからである。その年教員

になられたばかりで私達の分校に赴任されてきた二十三、四歳の女の先生だった。

その「見たの？」が、好奇からの質問だったのか、子供が見てはならぬものを見て可愛そう、何か言葉を掛けなければと

思われたのか未だに定かでない。その問いかけに、曖昧な返事を返したことだけ

を覚えている。その日の明け方祖祖母は、自ら命を絶

った。満年齢で八十九歳。人の死との初めての「出会い」とな

った。朝、玄関先が騒々しい。布団から出る。父と母がばたばたしている。祖母も

起きてきた。様子が変である。「とっしょにおばあが、亡くなった」と聞こえてき

た。家では祖祖母を「年寄り(とっしょり)おばあちゃん」祖母を「若おばあちゃん」と呼び二人を区別していた、なにせ八人

の大家族、祖祖母、祖母、両親、高校生

の伯父、私の兄弟三人である。「とっしょり」おばあちゃんの記憶を辿

るが、小さく丸くなって庭の草むしりをしている姿しか浮かんで来ない。兄弟が

懐いていたのは「若」おばあちゃんの方

で、自然の中にある摂理・法則めいたものを自分の経験からたくさん教えてくれ

た。両親以上に「若」おばあちゃんの影

響を受けて育ったと思う。それは兄弟三

人の共通認識でもある。いくら手繰ってきつと日常の中で話すことも一緒に何か

をすることもなかったであろう。今でこそ八十、九十と聞いて驚くこと

はないが、当時は七十を越えていると長生きである。近所に祖祖母の年齢の人は

いなかったし、家におばあちゃんが二人いることが不思議に思われた。

その時分祖祖母は、三人いた子供の二人を既になくし、孫(私の父)の世話にな

るという状況にあった。医者に掛かる様子もなく、今で言う認知症でもなく、さ

りとして祖母や両親達と百姓仕事が出来る身体でもなく、家回りの草引きや精々縄

作りの藁打ちをして一日を過ごすことしか出来なかつたのである。両親たちもま

た今日を生きることと精一杯な貧しい時代、年寄りを構うことなど出来はしな

かつた。それでも父は、孫や親戚を招待し

やかな米寿の祝を催した。襖を取り外して二間を一つにすると、十六畳の部屋に

なる、祖祖母を上座に据え二十人程の宴であったように覚えている。膳に並ぶも

のは、母の作った煮しめ(大根、こんにゃく、かまぼこ、サトイモ、ぜんまい、白和

え、さば寿司程度のもので、酒は二級酒。

記憶にはないが、赤飯か牡丹餅も出ていたことだろう。

それから二年も経たず「とっしょり」

おばあちゃんは、自分で編んだ縄を稲木に掛け、身体を預けた。一番下の段にし

か縄を掛けることが出来ず、その足は地に着いていた。私は、はっきりと見た。

その光景は今も鮮明である。何故自ら命を絶ったのか。今の私は、

祖祖母はこの世の「居場所」を無くし、そこに行き着いたと推測する。単に「も

う、いいわ」だったのかも知れない。が、心の置き場、身の置き場がなくなつてし

まったのではないかと思わずにはいられない。懸命に思い出そうとしても出て来

ない。それは家族誰もが祖祖母の存在を気に掛けてはいなかった証ではなからう

か。世代の違う異空間に祖祖母は一人居

て、自分とのみ会話する時間の中にいた。そこに特段の寂しさもなく悲しさもな

く、至極冷静に判断した、ここは自分の居場所ではないと。心的にも物理的にも

安んずる場所、自分の場所、そこに居てこそ己を保てる場所が人にはなくてはな

らい。俗に言うホームレス、様々な理由・事

情でそうなのであろうが、青いテントが探し求めた「居場所」ではなからう

か。私もまた自分の居場所をなくしてすつ

かり落着きをなくしたのは、昨年の夏だった。休みなく通った会社を離れると、

「家はいつしか妻の居場所、一年余り前に始めた店は従業員とお客の場所、自分の身も心も置く所がない。これは堪えます。」

あなたの「居場所」はありますか。

一つ屋根の下に暮らしながら、何も教えてくれなかった「とつしより」おばあちゃん、最後の選択で何かを伝えてくれた様に思われる。

それは、生と死というテーマを私に投げかけてくれたのである。十年の後、親の反対を押し切り私は「哲学」を学ぼうと一歩を踏み出した。

### 「芥川だより・ハイキングのお誘い」

集合場所 … JR高槻駅西口

日時 … 三月六日十時集合

コース … 社寺・仏閣

### 自由律俳句

鈴木 豊明

(口語。季語はなくてよい。十七字でなくてよい)

○ どこかで許し合う明日つむぐ歩幅

○ 私いつから倒れてる野面の夕日

○ 葉(ひこばえ)のこぼすことは

村が無くなつて

### 釣りいろいろ⑥

#### チダイ(血鯛)

周防春日丸

魚あれこれといっても、あくまでも自分が少しでも関わりをもったことのある魚についてであって、釣りもそうなのである。

だんだんその紹介できる魚も残り少なくなってきたところであるが、今までにないほど見ることが多かったチダイである。もちろん食べることにも事欠かなかったわけである。

このチダイ、ご多分にもれず釣りに行くとたまに釣れることがある。小さくても鯛が釣れたと喜ぶと「チダイ」だと言われ、ただ単に鯛の小さいのだからチダイだと思っていたが、そうではなくマダイとチダイは違うのである。ちよつと見るだけではマダイそっくりである。チダイをマダイの名で料理に使ったり、所によってはマダイよりもチダイが好まれることもあるらしい。

マダイとチダイのいちばんの見分け方は、尾鰭おひれの端が黒くないかを見ること。マダイなら絶対に黒くなっている。チダイははっきり赤くなっているか、一様に同じ色をしている。ここを見れば間違えないといわれて

### ◇魚あれこれ◇

いるが、まず目に付いた違いは、鰓蓋たがたの縁が血が滲んでいるように少し赤いのである。漢字の「血鯛」は鰓蓋が赤く血のように見えるからという説もある。

次は背鰭せびれの棘の長さである。マダイはきれいに並んでいるが、チダイは第三棘と第四棘が少し長いのである。

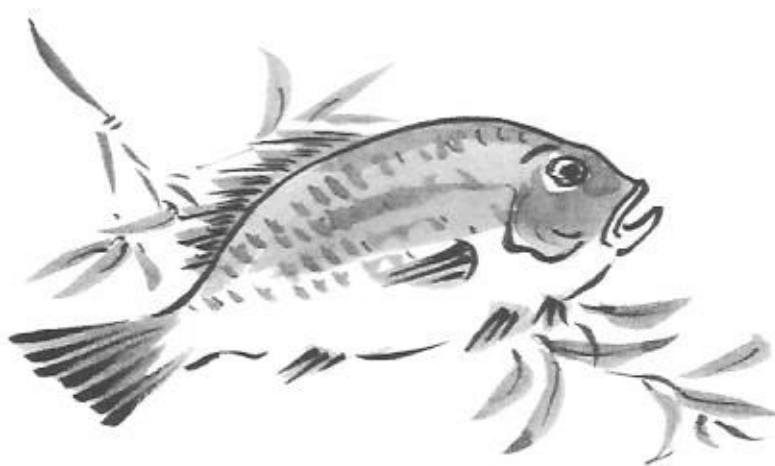
それから背中せなかの形の違いである。マダイは頭側が丸っこく後ろはなだらかであるが、チダイは全体的に丸っこく厚さが少し薄い。色も薄く見えるためか、背側に散らばる青色の小さな斑点がチ

ダイの方が少なく見えるのである。

しかし特徴がはっきりしないものもあるので迷うこともあるが、徐々にではあるが見ただけでもなんとなく分かってくるようである。

マダイが一メートルほどまで大きくなるのに比べ、チダイは大きくても全長四十cmほどである。小さいと目立たないが大きくなるとおでこ(前額部)が張りだしたようになっていかつい顔になる。

呼び名は、鼻折鯛、鼻鯛、花鯛、れんこだい、ちこ、ちこだい、姫鯛などがある。



### 編集後記

京都在住の読者が来店され、継続して読んでおられる旨を楽しく話して頂きました。今月号からは新しく二人投稿を寄せて下さいました。次号からも新たに一人投稿していただく予定です。

紙面の都合で、福岡努さんの「クイズ」は次号に掲載します。

これからも、読者である「あなたひとり」の為に「ささやかながらも発行し続けていきたい。」

引き続きご支援をお願いします。

「異色、異質を認めない均質的な日本の社会、会社にあつては、アメリカの企業や外資系会社、グローバル化が進んで外人役員もいる日本企業では、成果主義人事制度は成功したのかも知れませんが、私のいた会社を代表とする、伝統、従業員の真面目さ、組織に対する協調性を要求する多くの日本企業は、この制度の導入により多くの問題を抱え、真面目な社員を苦しめて、一部の勝ち組をはばかせて、結果として会社全体の活力を低下させています。正に、若者に大きな経済格差がついている日本社会の縮図でもあります。」

私が若い頃は成果主義もない時代で、職場に余裕があったのか、上司に恵まれたのか、入社三日目で早くも緊張が解けて、昼食後に仕事が始って暫くしてコックリと居眠りをしていました。それを見た直属の課長が電話でびつくりさせてやろうと思ったのか、居眠りしている私に電話をかけて来ました。何も知らない私は前の電話が鳴ったので瞬間的に目が覚めて受話器をとって、会社の名前を告げると、「〇〇の松田です。松田です。明石君よう寝てるなあ。仕事中は寝たらあかんで、部長がにらんでるでー。はっはっはー」と私の顔を見て電話で笑っていました。その電話で目が覚めて「すみません、もう起きました」と二メートルほ

ど離れて座って笑っている電話の主に向かい謝り、受話器を置きました。

この事が原因で評価が低くなり、私のサラリーマン人生で出世が遅れたとは決して思いません。現に出来の悪い私をよく管理出来なかった、この課長は役員待遇になり、にらんで居た部長も副社長になり、またこのことを横で見、腹を抱えて面白がってた隣の課長は社長まで上りつめました。私は、この部門とは五年後の異動で転勤してしまい、離れてしまいましたが、大らかな職場で培われた人間関係は、私のその後のサラリーマン人生に大いに良い影響をあたえ、サラリーマンとしてのベースを形成出来ました。

私は、良く仕事が出来た優秀社員という評価はもらえませんでした。度々うたた寝をする問題のある社員という罰点も付けられませんでした。好きな球が来たらホームランをことに打つ長距離バッターである、との人事評価をこのユーモアの分かる上司から戴き、それを支えにしてその後、三〇年程の長いサラリーマン生活を送らせてもらいました。

その結果は、余り出世もせず、部長に成れませんでした。その頃の人間関係は今でも続いている、私の大いなる人間形成の財産になっています。

高槻特産

## 撰津峡漬

撰津峡漬の白瓜は、なにわの伝統野菜に指定されました。芥川の清流が撰津峡から平野部に流れ込むあたりがこの瓜の産地です。塩と上質の酒粕のみの伝統製法の珍しい（甘くない）奈良漬であります。

古くは太閤秀吉が、山崎の合戦の折に食して「美味である」と申した由、又、徳川家康が大阪夏の陣の帰途、西国街道で「このウリはういやつじゃ」と誉めて以来、幕府献上品になったと言われています。カリカリとした歯ざわりと酒粕の豊醇な旨味がよく調和して「お茶の友、お酒の友」として昔も今も喜ばれております

- 地元高槻の特産品ですから、お土産に好適です。
- 保存しても風味が変わりませんから、備蓄や進物に好適です。
- 真空パック・1舟箱入り、千円位からとお手頃です。  
角タル入りも重宝です。
- ポイントカード2倍券セール（下のサービス券をご持参下さい）

ポイント・サービス券⑨茶

\*\*茶舗と共通です\*\*



営/10時~18時 休/ 日曜、祝日  
TEL (072) 682-0310  
FAX (072) 682-6915

